

---

# レダ魔法学園ファンタジー班

モブにもなれない人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レダ魔法学園ファンタジー班

### 【Nコード】

N0102Y

### 【作者名】

モブにもなれない人

### 【あらすじ】

とある魔法学園、桜が咲く季節の入学式。極々普通の男である主人公とその周りの主人公のお話。

## プロローグ

舞台は地球ではなく別の世界。  
いや厳密に言えば地球なのだが……

“魔法” “異種族” “異世界” が認知されつつある別世界の地球。  
突如世界の数ヶ所に穴が開いたかと思えば、そこから獣よりよっぽど恐ろしい魔獣と呼ばれる化け物が飛び出してきて人間を蹂躪した。

その夥しい数は人々をパニックに陥れ、根も葉もない話を蔓延させ、略奪と絶望が世界を包んだ……。

だがそれも最初の事、一口に魔獣と言っても強さはピンからキリまで様々だったし、弱い魔獣はちよつと戦い慣れた者ならナイフでも倒せた。反対に強い魔獣はナパーム弾をぶち込もうがミサイルをぶち込もうが、電磁砲をぶち込もうが死ななかつた。

世界はまず弱い魔獣を狩る事に決めた。平和に溺れた人々を駆り出し、戦い方を教えて各地に派遣した。後に冒険者と言われる者達の始まりである。

それによつて弱い“化け物”は数を減らし、学習した彼らは必要な時以外は自然の中に身を隠すか、穴の“向こう側”へと帰って行く。残つたのは強い、真正正銘の“化け物”ども。

弱い魔獣こそ追い返しに成功したものの、強者はどうすることも出来ず、世界はその猛威に頭を悩ませた。何せ、強いものにも幅があり大人数で掛かれれば対処出来るのもいれば、どう足掻いても無理なものもいるのだから。まさか訓練を施した人たちに死んでこいなんて言う訳にもいかず、死刑囚等の重罪人を生け贄にしようとする

ば脱走を試みる者が後を絶たない。

打つ手は最終手段、核の使用しか無いと思われていたが――

ある時、穴の“向こう側”から複数の人間が現れた。

彼らは困惑する世界に向かつてただ簡潔に、述べた。

「我々は魔獣を呼んだ責任がある、だから後は我々がやる」

と。

彼らは科学染み込んだ常識を歩く感覚でぶち壊して残りの化け物をせん滅させて行く。

陣を書いたり何かを唱えたりして水炎雷、果ては天災とも言うべき嵐や地震をも自在に顕現させたり、剣士らしき人間は助走無しで数メートル跳び、ミサイルの通じなかった堅い防御を容易に貫いたり。

誰もが昔に憧れたファンタジーな物語の主人公、勇者御一行の言葉がピツタリだった。

それから数年――物語は穴の“向こう側”にある魔法学園の、後に伝説と言われる班のお話……

## 第一話 コチラへ来たある日のこと

「ギルドSSSランクが正体を隠して学校へ通う、ですって。あははは！ オカシー話！」

「えっと、こんな往来で大笑いしないでくれる、かな？」

都内某所。茹だるような暑さと言つのはコチラ（・・・）だけなのだけれど、横にいる女の子は暑そうな素振りも見せず携帯の画面を見て笑っている。おかしいおかしいと何度も、目を瞑って口を開き、空いている左手をお腹に当てて腰まである金の長い髪を不規則に揺らして。その小説を書いている作者さんはこんな大笑いされるなんて露にも思つてないだろう。

そんな彼女に僕は呆れたように窘める。既に、人の目が痛い。友人の僕から見ても彼女は凄く可愛い。その傍らに居るのが冴えないチビで眼鏡の男だなんて周りの輩は納得しないのは自明の理だ。ナンパと言つのはムコウとコチラ、両世界の数少ない共通点だ。大笑いしている、なんて異レギュラーをかき消すほどの可憐さは男の心を即座に掴むとかなんとか……

「君可愛いねー」

「気弱そうな男なんてほつといてー、俺らと遊ぼうよー」

心配している側からこれ。もう何度見てきたか僕は数えるのを止めているからわからない。彼女は携帯から視線を外し、声をかけてきたチャラそうな男二人を見上げてわからないと言った風に指を顎に添えて小首を傾げる。これもいつも通り。と言うことは必然的に彼女の次の言葉も予想が着く訳で。

「貴方達は私の好みじゃない」

ハモった。やっぱりこの台詞だ。

「ちよつと、私の台詞に合わせないでよ！」

「いいじゃないか、毎回毎回コチラに来る度に軟派避けだなんて僕を駆り出して。効果が無いってわかってるのに」

抗議の声を僕は一蹴。軟派してきた二人の男は無視され、ぼかんと口を開けて佇んでいた。哀れ、やつすいプライドも台無しである。ま、面白いから良いんだけど。それより本当にどうにかして欲しい。コチラに来る時は僕を無理矢理連れて来るのだから。軟派避けなら同じ班にイケメン君がいるじゃないか。

「アイツは女の子に引つ張りだこじゃない。その点アンタはいつも暇そうだし」

「勘弁してくれよ……どうせ絡まれたって君ならー」

こんな可愛い女の子と歩けるなんて名誉な事じゃない、と彼女は続けた。ねえ聞いた？ 彼女は暇そうだからと僕を連れ出してららしい。大きなお世話、君は容姿は良いけど女の子らしさが無いから一緒に歩いたって自慢出来ないよ。なんて言えたら良いのだけど言ったら文字通り火や雷が飛んで来るので胸の内に止める。

と、そんな言い合いをしていたら男の方割れが彼女の肩を掴み険しい顔つきで口を開こうとしていた。大方無視するんじゃないかなことを言いたいのだろう。あーあ、無視された時にさっさと消えていれば良かったのに。

「無視おわっ!？」

やべっ僕エスパー? 最初の二文字がまったく同じだった。これで残りも聞ければ良かったのだけど残念、男は彼女に手首を掴まれそのまま力任せに一本背負いみたいな感じで投げられて地面に背中を強打してしまっていた。

「ほら、絡まれたって君なら心配ないでしょ？」

「気分の問題よ気分の」

投げられなかった男の方は彼女に恐れをなしたのか、地面に寝ている男を起こしてさっさと逃げ出す。僕らはそんな男達を気にもかけず、中断された会話を再開。

「君でもそんなこと考えるんだ? 一人しかいないギルドランク特Sのフィーネ・アイツベルンさん？」

くすり、と笑いながらからかうように彼女の正体と名前をフルネームで紡ぐ。彼女は不機嫌そうに下の名前は好きじゃない、と言いつつとさっさと歩きだしてしまった。

さて、自慢じゃないが僕は平凡だ。彼女と違ってギルドランクも真ん中よりやや下だし、同じ班の学年首席みたいに成績は良くない。真ん中より上つてくらしい。血筋だって班員の一人みたいに勇者御一行の血筋は遙か昔にもない、普通の家系。班員の一人はコチラ側からの留学生だが生憎初等部からムコウ側の学校だし、家系はさっきも言った通り普通だから王族ってわけでもない。僕の通う学園では入学してから卒業までの三年間、六人一組の班を作って卒業まで

を共に過ごす制度があるのだが……僕の班はちょっとおかしい。

一人はムコウでは一人しかいないギルドランク特Sの女の子。

一人は入学試験を満点突破した超秀才の女の子。

一人はコチラとムコウが繋がった昔、コチラへ侵入した魔獣を駆逐するべく立ち上がったコチラ側で言う“勇者御一行”の子孫である男の子。

一人は魔法が使えないはずのコチラから僕の通う学園へとやってきたいわゆる留学生みたいな男の子で、

一人はムコウの世界で学園のある国を取り仕切る王様の家族。つまり王族の一員である女の子。

そして最後の一人はこの僕。平々凡々、居ても居なくても変わらない程無個性のその他大勢に属するモブである。

どうしてこうなったんだっけ……？ 今でも僕は暇な時にそう考え、入学式の前日を思い出すのだ。

そう、あれは確かいよいよ明日学園に入学すると心踊らせていた時――

## 第二話 命は軽い

「な、なんで、なんでこんなところにこんなヤツがいるんだよお！？」

帰投予定時刻はとつくに過ぎた夜更けの何時か。明日、晴れて全寮制のレダ魔法学園への入学を控えている僕はギルドへ赴き軽い採集依頼を受けた。討伐のようなスリルと華やかさ、何より報酬が低いために敬遠されがちな採集依頼ではあるけど、依頼地の地理が把握出来ることと難易度が低いことは僕みたいな低ランクの冒険者にしてみれば丁度良くて。入学式の事もありどうしようか迷っていたとき、近場の依頼を見つけてこれだと受けたのが運の尽き。規定量の品を採り終えてさあ帰ろうと出口へ歩いていたら危険度Aの魔獣に出くわしてしまったのだ。

普通、危険度Aの魔獣なんてそれこそ街道から大きく外れた森や山の奥地にいるものなんだけど……どうしてここにいるのかなんていくら考えども答えはわからない。

「グルオアアアアアアアアア！」

「ひっ！」

ああああ、吼えてる！ 獲物を見失って苛ついて吼えてるって！ しかも声からして近い！ 凄く近い！

ちなみに戦おうだなんて考えは最初からない。僕は下級の火魔法を二つと他は日常レベルの無魔法しか使えないし、剣だつて一応持っているけど剣術はほとんど素人。斬りかかればあの魔獣じゃなくて剣がぼっくり行くに違いない。

この現状を知ってるかい僕？ もちろんさ、この状態を“詰み”

って言うんだろ？ H A H A H A H A H A !

現実逃避をしている僕を攻められる人が果たしているだろうか。

この場には僕以外いないのだから攻められることはないだろうが。

討伐依頼と違って採集依頼の場合、受注者が出した帰投予定時刻を大幅に過ぎた場合ギルドから救援が来る。あくまで名目上は。その実は死体搜索兼策敵及び強力な魔獣を発見した場合の討伐なんだけど、今の僕にとってはそれが待ち遠しい。きっと先のほうで大まかな方向はわかってー

バキヤツ！

木が、僕の身を隠していてくれた木が丁度僕の頭数センチ先から無理矢理殴り折られた。えっと背後を振り向けば獲物を見つけた猛禽の如く鋭い目をしている魔獣が、その豪腕を木ではなく僕に叩きつけようと再び振り被っていて。

ああ、今から僕は死ぬのか。人の世界じゃ奪えば処罰される程なのに、自然という枠の中じゃこんなにも

「命は軽い」

## 第二話 命は軽い

「それがわかれば冒険者として一人前よ！」

それは少女の声だった。大体僕と同じくらいっぽいな。少なくとも云十歳とか年老いたおばさんの類ではなくて。見ればギルドの高ランクが正体を隠すために羽織っている魔法防御の呪文が綴られたローブで身を包み、危険度Aランクの魔獣をとて目の前の背丈

の少女が使うような大きさでない大鎌で首から上を綺麗に刈り取っていた。

不意打ちしたとは言え、強力な魔獣を一閃で葬り去る事を出来る程の実力。僕の頭の中には一人の人物しか思い浮かばない。

「ねえ、大丈夫？」

その扱う鎌は屈強な戦士よりも大きく、鋭く、対象をほぼ一撃で討伐する。その人物のギルドランクは特S。世界で只一人、“彼”のためだけに作られたとまで言われている。“彼”の姿を見た人はいないらしく、別性にアンノウン・スイーパー《実体無き掃除屋》なんて呼ばれている。

「あ、貴方はまさか……ら、ラスト・サイザー《一撃の鎌を扱う者》、です、か？」

僕は震える声で、所々詰まりながら“彼”の通称を紡ぐしかかった。冒険者なら誰もが憧れる人物なんだから、冷静に言える訳もない、よね？

—————

朝日がカーテンの隙間から漏れていて眩しい。寝起きは最悪、ではないけれど悪い方。ぼんやりとしながら今日は学園の入学式だったと思わずと慌ててクローゼットから自分の制服を取り出した。

深青のブレザー。右の胸元にあるポケットには今年の一年を指し示す緑のラインが斜めに一本。二年、三年と学年が上がる度に色は

変わらず一本ずつ増えていくんだっけ。ちなみにネクタイも緑色でしかも取り付け型と結べない人には嬉しい仕様。今は春とだから冬服、やや黒よりの灰色のチェックの長ズボン。実際に着替えてみるとうむう、今日から学院生徒って感じがやつとしてきた。

朝食はパンとシチューで軽く済ませ、高鳴る鼓動と緊張からか若干痛みを訴える腹部を無視して鞆を持つと、誰もいない部屋に行つてきますと言つてからドアを開けた。今までとは違う光景。あれ？

と一瞬戸惑つたがそうだった、昨日から僕は実家ではなく学院の寮の方に住んでいたんだ。前日は置いていて、それにしても朝まったく違和感を覚えなかつたけれど、寝ぼけて凄いなあ……。

結局、あの後僕を助けてくれた少女（声からしての仮定）は僕の質問に答えることなく姿を消した。尤も、自分の出した大鎌へ視線を見やつた後に隠しきれないほどの動揺を見せたのだから、答えは出ている様なものだったけれど。オマケに、心身共に疲労困憊になりながら帰投したと思えばお偉いさんが使いそうな応接間に通らされ、ギルドマスターから直々に今日のことは他言無用だとかやや恐喝気味に言われた。もう早く帰って寝たくて仕方ない僕はほぼ即答で首を振つた。それに、言い触らす気なんて更々無い。言つても信じでは貰えないだろうし。

寮から学園までの道のりは短い。徒歩五分と言つたところ。けれどエントランスで出会つた生徒らしき人に会釈して外に出て少し歩き、後ろを向けば僕と同じ新入生を指し示す緑が視界に映る。中等部から進学したのか友達と談笑する者、僕と同じ編入組なのか一人で緊張しながら歩みを進める者。僕もあんな顔をしてるのかななんて思つて苦笑してしまつた。

ま、まあ入学式だしそもそも他にも友達が作れるとか色々不安もあるし。せめて一人にはなりたくないなあ……。

「むう……迷ってしまった。なんとかならんかの？」

「見知らぬ人に捕まったかと思えば道案内かよ……。わーった、俺も丁度体育館行くところだったから着いてこい」

「妾を案内するのだから丁重に頼むぞ！」

ちよつとルートから外れた方向でやつぱり僕と同じ新入生が二人きつと女の子の方が迷ってしまつて男の子の方が運悪く捕まつてしまったと言つところかな。ご愁傷様、なんて意味のない合掌をしつつ、巻き込まれないように見ためぬフリを突き通す。女の子の方はどこかで見たような気がしなくも……。ない。

しかしながら、その二人組はなんと僕の後ろに付いたようで少し偉そうな女の子の声と面倒くさそうな男の子の声が楽しそう（女の子の方だけけど）に交わされて、それが少し羨ましく思えた。いいなあ、もう友達出来たんだーって。

「命は軽い、か……」

ふと、昨夜の案件を思い出して何気なしに呟いてみる。突如現れた大鎌の人物。それがわかれば冒険者として一人前らしいけど、生憎僕のランクは下から三番目。一人前どころかやつと半人前つてところだ。果たしてあの人は僕のランクを知っていたのだろうか？

もし知らないのであれば……。そのまま知らないでいてほしいな。だって冒険者の頂点に位置する人に認められたのだから。だから本当は低ランクの冒険者だなんて知られたくなかった。例え二度と会うことが無いにしても。

### 第三話 青空はどんより

#### 第三話 青空はどんより

入学式は別段変わったこともなく無事に終わり、今は教室へ向かっているところ。強いて言うならば壇上に入学試験をトップでくぐり抜けた女の子が新入生代表をしていて、才色兼備とはこの事かと若干の妬みを覚えたり、特待生だと衆目に晒された男子生徒が勇者御一行（昔、別世界へ飛び出した強力な魔獣を討伐した今で言うところの高ランク冒険者）の子孫だと言う割には寝たいと言わんばかりに欠伸していたのが印象に残ったりしただけ。

今は教室で、座るところも決まっていなかったために各々が自由な場所に座って僕らを受け持つだろう先生の到来を待つ。ちらと横目で教室内を伺えば、入学式前に僕の後ろで話していた二人の男女、新入生トップ、寝ている勇者御一行の子孫とこれだけで話題には事欠かなさそうな面子が揃っている。きつと、クラスで過ごしていけば注目を集めそうな要素を持つ人を更に見つけることが出来るのだからけど、出来ればそんな人達とは関わり合いたくないなあ……。

「はいはいはい、お喋りはそろそろ終わりだ」

ふと、がらりと教室のドアが横に滑り、入り口から複雑な模様の描かれたグローブをしている中年の男が入ってきた。まるでやる気を感じられない声を発しながら教壇の前に立つと、深緑の黒板に白いチョークで一閃二閃、軽い音と共にチョークを滑らせて名前を書く。

ガブ・オーフェリット。

年齢の割に子供っぽい名前だなんて、思ったりしちゃうのは不可抗力だろう。背格好とか無精髭とか見る限り、とても子供らしいところは無いけれどね。

担任の先生が紹介を終えると次は僕達の番、一人一人が緊張しながら己の名前と個性になりそうな一面を発し、それが終わると大なり小なり安堵の表情と共に着席していく。僕もその例に漏れることはなく、簡単に済ますとさっさと着席して少し遠い窓の外を見た。空は澄んだ青色が無限に広がっていて、所々にイレギュラーの白い雲がぼつぽつとある。やれやれ、学校生活が青空みたく順調に進んでくれればいいなあ。

「入学式でもさんざ言われただろうが入学おめでと。お前等は今日からレダ魔法学園の生徒となった。だだっ広くて最初は迷うこともあるだろうが、大まかな道くらいは早く覚えるよ」

じゃなきゃ勉強どころじゃなくなるからな、と苦笑いするガブ先生。後で聞けばこの学院の卒業生なんだとか。体験者が言うത്と真実味があるというか……。実際、この学院は敷地が他校と比べ圧倒的に広い。実地訓練用の森だとか色々ある。全てを把握しているのは校長だけなのは、なんて囁かれているぐらい。

「じゃあまずはこの学園生活には欠かせない、しかしその後の生活を左右する班決めをしようではないか」

教室が、一気に騒がしくなる。僕も取り留めもない思考を打ち切つて、ガブ先生の方を向く。

「レダ魔法学園は三年間を費やして生徒達に座学や実習をするが、その時に一緒に実験や実習を共にするクラスメイト達を班と呼んでその仲間を入学日に決める。厄介な事にそのメンバーはその

日から卒業なり退学なりで学院を去るその時まで変わる事はなく、メンバーとの交流に失敗してしまえばその後の生活はまるで腐ったバナナのように黒くなってしまう。

どうかまともな人と一緒になりますように。僕のささやかな願いは、しかし次の一言で呆気無く壊されてしまうのだった。

「この班決めは各々が自由に決めろ、と言つつもりだったんだが……」

言いにくそうにするガブ先生。先生の性格にもよるが班決めは重要な事もあり、相性の合った人間と組むべきだと考えて個人が自由に決めることを推奨しているらしいのだけれど。まさかガブ先生……。

「フィーネ・カドウス、リト・グランベルグ、メイナ・エヴァット、セシル・クレマンズ・ベネディクト・フォール、それからリオ・マエスタスの計五名に関しては同じ班になるようにしると校長からのお達しだ。リトやメイ、セシルはわかるが……フィーネとリオは一体何をしたんだ？」

なん……だって？ あ、リオ・マエスタスは僕の名前。フィーネって子はともかく、リト・グランベルグは例の勇者御一行の子孫、メイナ・エヴァットは入学式の新入生代表、とどのつまり一年生トップ、セシル・クレマンズ・ベネディクト・フォールは確か……このレダ学園があるセイン大陸を納めるベネディクト家の第……二だったかな？ の王女。フォールと言うのは見聞を広めるべく一般社会で生活する王族に付けられるもので、この名が付いている時は一般市民と同等の扱いをしるってルールがある。ま、実際には皆畏まったりするしそうですかとすぐ割り切れる事じゃないから在って無いようなルールだけだ。

話を戻すと、荒波どころか津波級の個性を持った面々がメンバー  
って事になる。クラスメイト達はざわざわと僕らの内誰かに視線を  
向け、同情なり嫉妬なり好奇なり各々が様々な視線をぶつけてくる。  
平穩、の一言が一瞬で消えちゃった……

――

「えっと……」

とある教室の一角、他のクラスメイト達が思い思いの相手に声を  
かけ、班編成に勤しんでいると言うのに、僕ら六人は通夜でもして  
いるかのように静かで、かつバラバラだ。ちなみに六人目はセシー  
ル様が連れてきた。体育館まで一緒だった、あの男子生徒だ。勘弁  
してくれよと言いつつも特に抵抗することなく着いてきた彼は僕を  
チラと見ただけで何も言わなかった。

「ねえねえ、メイナさんって好きな男の人とかいないの？」

「入学初日に出来るわけがありません。とりあえず私は軽そうな男  
性は嫌いですか？」

リト様はメイナさんに笑いながら軟派紛いの事をしているし、メ  
イナさんはリト様の対処をしている。衆目に晒された時はそうでも  
なかったけれど、今見ればリト様は結構格好よかった。勇者の証で  
ある赤銅の短髪と真紅の瞳。このセットは勇者の末裔にしかない特  
徴らしく、世界でもその家系にしか現れないとのこと。メイナさん  
は眼鏡を時折直しながら三つ編みにした黒の髪を揺らしている。少  
し丸みを帯びた顔は彼女の低身長と合わせり年以下にしか見えない。

「妾と同じ班じゃのう。まさかお主もこの学校に来ているとは思わなかったぞ？」

「きつと姫様がいらっしやっただからかと思えます。突然ここへ通えと言われた時は何事かと思いましたが……」

「そう堅くなるでない。今はフォールの名が付いておるから。しかしその様な依頼は出してはいはずじゃが……」

セシル様の方を見れば金髪のフィーネさんと親しげに話していた。髪が美しい銀を持つセシル様が隣にいるからなのか二人が美少女だからなのか、何とか絵になっている。クラスの男子も一部が二人に目をやっている。しかしわかったのはフィーネがセシル様のご交友だと言うこと。なるほど、それなら同班に置かれるのもわかる。

「まったく、巻き込まれる方の身にもなってほしいぜ……」

「本当だよ、僕なんて普通に過ごすつもりだったのに」

「お互い苦労するな、ああ俺はヤマグチ・ナオトだ」

ふと隣から巻き込まれた事を嘆く声が聞こえたため、仲間意識からか思わず彼に同調してしまった。僕も巻き込まれたクチだ。平穩に平穩にと願っていた僕にとっては戦争もないのに徴兵令を出された気分だよ。

メイナさんと違って先端がやや茶色の黒髪はセットしてあるのかピンと伸びていて、初対面ながら彼には合わないのではとついつい思わせちゃう。自らの手で手首を掴んで数センチのお釣りが出るく

らいに彼の腕は細くて、前衛には向かなさそうだ。

「ヤマグチって言うの？　なんだか変な名前だね」

「おっと、こっちじゃあ名字が後なんだっけか」

「こっち？　ってことはヤマグチ君はもしかして」

「そ、お察しの通り向こう出身。さしずめ留学生ってところかな」

「え、ええー!？」

セシル様に連れられてきた男子生徒は異世界人でした。どうやらこの班で普通なのは僕だけみたいで。驚愕の声を挙げる僕に彼、ヤマグチ君は聞いてなかったのか？　と首を傾けていたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0102y/>

---

レダ魔法学園ファンタジー班

2011年11月9日08時13分発行